

生姜を楽しんで！

岩下の新生姜ミュージアム

「岩下の新生姜」の誕生

1978年当時の社長岩下邦夫さんは、まだ見ぬおいしい食材をもとめて台湾出張へ出かけました。この時の機内食で食べた生姜は、みずみずしく食感がよく、フレッシュな風味があり、日本では食べたことのない味に出会いました。産地は、台湾在来種の生姜「本島姜(ペンタオジャン)」であることがわかりました。

それから日本にもこのおいしさを届けるため現地を調べていくと、生姜の芽が伸びるたび土をかけて新芽をのばしていく手間のかかる作業が必要だったのです。台湾と同じように育てることは出来ないため、「適地適作」をモットーに栽培技術の向上など農家との取り組みに力を注ぐことにしました。

いろんな課題にぶつかった結果、低温管理と低温輸送に着手しました。試行錯誤を繰り返して、漬物業界初の「コールドチェーン(低温管理・輸送)」を確立しました。こうして飛行機の中での衝撃的な出会いから9年の歳月をかけ、「岩下の新生姜」が誕生しました。

鈴木 菜湖(大穂)

↓cafe new ginger

フード、ドリンク、スイーツまで、すべてのメニューに「岩下の新生姜」を使用しています。全メニュー生姜乗せ放題という生姜好きにはたまらないサービスも！一度食べたなら癖になる新感覚なメニュー、ぜひ皆さんも足を運んでみて下さい！



→ピンクニュージンジャーカレー(800円) ピンク色のカレーで具材は岩下の新生姜です！

取材活動中に逆取材

下野新聞(しもつけ新聞)の佐野恵さんから、合同取材活動をしている私たちが取材される逆取材を受けました。的確な質問、聞いたことを簡潔に書きとめる能力など、記者として勉強になることばかりでした。

佐野さんが記者になった理由は、色々な人と関わりたいと思い、学校の先生を目指していたのですが、若い人だけではなくもっとたくさんの人と出たいと思い記者になったそうです。

佐野さんはこれからも栃木の良さだけでなく違った方面から栃木の面白さを伝えたいと言っていました。そして、新聞の信ぴょう性を大事にして、栃木を伝えていきたいと言っていました。

私たちが佐野さんのようにしっかりと自分の伝えたいことを大切に新聞作成をしていきたいと思えました。

中山 雄斗(石下)・中山 友貴(石下)



ミュージアムショップ

岩下の新生姜ミュージアムショップでは、岩下食品の商品の他にもオリジナルグッズが充実しております！

家族や友人のお土産に悩んだときは、ショップ前に立っているベッパー君に相談するのもいいと思います！

↓ポテトチップス岩下の新生姜味(130円・税抜)

開けた瞬間に生姜の香りが広がり、口に入れると生姜の風味と塩気があって生姜が苦手な方でも、いくらでも食べられます。



下野(しもつけ)新聞記者の佐野 恵さん

岩下の新生姜ミュージアム

住所: 栃木県栃木市本町1-25
休館日: 火曜日、年末年始
閉館時間: 10時~18時
カフェ: 11時~18時ラストオーダー17時30分

←岩下和了(かずのり)社長

「愛があればフリー素材!!」愛があれば自分の生姜の素材などを自由に商品化やコラボをしていただいで構いません。そうすることによってお互いのPRにもなり、利益が生まれるのです。と真剣な表情で話していました。

↓ジンジャー♡神社

生姜の効果で夫婦や恋人の仲も一気に縮まるかも?願いが叶ったというお声も届いているそうです!あなたも生姜の神様にお願いしてみませんか?



↓かける岩下の新生姜(158円 税抜)

みじん切りタイプでお豆腐やサラダ、お肉など、いろいろな料理にかけてお楽しみいただけます。便利なカップ入りで、ちょっと使いたいときにちょうどいいお手軽なサイズです。



→岩下の新生姜お徳用パック(298円 税抜) やさしい辛さ、爽やかな香り、シャキシャキとした歯ごたえで、刻んで料理の付け合わせにしたり、料理素材としても大活躍です。たっぷり入っているので、生姜好きにはたまらない商品です。

小江戸時代にGO！

栃木市蔵の街を訪問



↑とちぎ蔵の街観光館

大通りに面した見世蔵(当時店舗として利用)を観光案内、土産販売として再利用しており、蔵の街のおみやげを買うことができます。

江戸時代末期から明治時代にかけて建てられた蔵で、建設には釘を一切使用していません。梁(はり)に大きなアカマツが使われています。

奥にある土蔵(倉庫としての蔵)は一部が解放されていて、自由の中を見学することができます。中には当時使われていた「甕(かめ)左下」や「桶(おけ)右下」などが展示されています。



華麗で豪快なデジタル技術

とちぎ秋まつりを再現「山車会館」



↑巴波川(うずまがわ)

とちぎ山車(だし)会館

伝統ある「とちぎ秋まつり」に使われる山車を展示している資料館です。「とちぎ秋まつり」の興奮をいつでも楽しめるようにデジタル技術で再現されていて見学することができます。絢爛豪華(けんらんごうか)な山車の展示には圧倒されます。

入館料: 大人500円 小中学生無料
会館時間: 午前9時~午後5時
定休日: 毎週月曜日
住所: 栃木県栃木市万町3-23
TEL (0282) 25-3100

6月10日(月)に栃木市の蔵の街と新生姜ミュージアムに行きました。今回は夏に参加する全国総文展に向けて、新聞作成技術向上のため岩瀬日本大学高等学校と合同取材を行いました。当日は生憎の雨でしたが、きれいな街並みを見ることができました。

栃木市 蔵の街

栃木市は北関東の商都といわれてきました。江戸時代に朝廷からの勅使(ちよくし)が通る道を日光例幣使街道といい、栃木市は、勅使の宿場町となり人や物が集まるようになりました。そして巴波川(うずまがわ)から江戸までの舟運で商都として更に発展しました。

蔵の街大通りでは情緒深い街並みが軒を連ねています。ガイドマップや案内板が多く設置されているので観光もしやすく、気軽に行くことができます。

山本 有紗(城ノ内)

↓「とち介(蔵の妖精)」

栃木市マスコットキャラクター



蔵の街の案内をして下さった「とちぎ蔵の街観光館」土屋さん

巴波川(うずまがわ)と蔵の街遊覧船

栃木市の市街地を今も流れる栃木の歴史の中心となった川です。蔵の街は巴波川(うずまがわ)による交易によって栄えてきました。

江戸時代には利根川を下り江戸の木場まで材木を運ぶための多くの商品や文物が取引され、巴波川沿いに数多くの蔵が建てられました。、栃木市は商人の町として栄えました。

巴波川を周遊することができる蔵の街遊覧船は今でもその美しい蔵の街の風景を眺めることができます。

岡野 悠奈(坂東東)

山車(だし)の歴史

山車の歴史は古く、祭礼に使われたものでは平安時代からあります。

昔、神様が天から地上に降りるためには、まず、山の頂に留まると考えられました。そして祭りの際に神様をお招きする臨時の山が必要になりました。また、この山に巡行させるために車輪を付けたことから山車(曳き山)と呼ばれるようになりました。

鈴木 菜湖(大穂)

←静御前(しずかごぜん)

源義経の「愛妾(あいしよ)う・愛人)」であった。

静御前の山車は1874年、市内にあった県庁構内で開かれる祭典に使うために栃木市が東京・日本橋から購入したものだそうです。



生徒会新聞
栃木市特集号
2019.6.19
つくば秀英高等学校
生徒会発行

生徒会発行
「秀花新聞」
全国高等学校総文展
新聞の部6年連続出場

新聞記事の
ネグ募集中!
新聞ボランティア
募集中!

INDEX

- 1面 ・小江戸時代にGO！ 栃木市蔵の街を訪問 ・華麗で豪快なデジタル技術 とちぎ秋まつりを再現「山車会館」
- 2面 ・生姜を楽しんで！ 岩下の新生姜ミュージアム ・取材活動中に逆取材

今回は茨城県近隣の栃木県を訪問しました。

※記事内の()は(出身中学校)になります。